

日本人大学生にみられる 英語後置修飾のストラテジー

森 千 鶴

1. はじめに

日本人学生が書いた英作文を分析すると、自分の不得意とするところ（構文や発想）は使わずにすますという現象が発見される。たとえば Schacter and Hart (1979) によると、日本人、中国人、アラブ人、ペルシャ人、スペイン人の書いた英作文を分析してみたところ、特定の言語話者がある特定の構文を避けて通る **Avoidance Phenomena** が発見されたという（下表参照）。

表 1. Tentative classification of avoidance phenomena.

Construction	Arabic	Chinese	Japanese	Persian	Spanish
Passive	+				
#Verb infinitival complement			+	+	
Verb clausal complement					+
#Verb gerundive complement				+	
Relative—Subject		+	+		
Relative—Object		+	+		
Relative—Oblique object			+		
#Noun infinitival complement				+	
Nominalization—gerundive					+

Schacter and Hart (1979), p. 42

日本人が避けた構文としては、**Verb infinitival complement**（いわゆる不定詞の名詞的用法）と、すべての関係詞節があげられている。このうち関係詞節について、Schacter は 1974 年の論文で次のように説明している。

A partial answer to this question lies, I think, in the difference be-

tween the two groups with regard to dimension 1, the position of the relative clause with regard to the head NP. Persian and Arabic students already have postnominal relative clauses in their native languages. Chinese and Japanese students have prenominal relative clauses in their native languages and just learn to switch relative clauses to a postnominal position in the process of learning English. (The switching from pre- to postnominal position is not the only problem for the Japanese and Chinese students; in most cases they must also change the internal order of the main constituents within the relative clause.)

Schacter (1974), P. 210.

つまり日本語や中国語は、名詞を前から修飾するパターンしか持たないので、名詞を後から修飾する英語の関係詞節は日本人や中国人にとっては理解しにくいものであり、その結果が **avoidance** となって表われたということであろう。**Schacter** の論考は、母国語の干渉は **error** として表面に現れる以外のさまざまな場所に及んでいることを示唆しており興味深い。

日本人が関係詞節を避けて通るのは、母国語からの干渉（つまり後置修飾を持たない日本語からの干渉）であるということが明らかになったのだが、ここで **Avoidance Phenomena** とは離れて、日本人と英語の後置修飾について考えてみたい。**Schacter** の論文では関係詞節だけを問題にしていたが、日本人は他の後置修飾についてはどのような対応をしているのだろうか。日本語にはたしかに名詞の後から修飾する方法はないが、「修飾」の用法そのものは存在しているのである。日本人は名詞の後から修飾する用法すべてを苦手としているのか、あるいは関係詞節という複雑な構造を持つ用法のみを苦手とするのかは明確ではない。そこで本稿では、典型的と思われる英語の後置修飾のいくつかのパターンに対して日本人がどのように対応するかを調べ、数ある後置修飾用法の中で特にどの用法を苦手としているかなど探ってみたい。また、このような母国語にない用法に対してどのようなストラテジーを用いて処理しているか、なども調べてみたい。

2. 調査の項目と方法

「英語の後置修飾」とひと口に言っても、いろいろな種類がある。一色(1976)によると、以下の10種類に分類される。

- 1) 名詞＋形容詞
- 2) 固有名詞＋官職・称号・その他
- 3) 名詞＋現在分詞または現在分詞に導かれる語句
- 4) 名詞＋過去分詞または過去分詞に導かれる語句
- 5) 名詞＋不定詞または不定詞を含む語句
- 6) 名詞＋代名詞
- 7) 名詞＋副詞または前置詞
- 8) 名詞＋形容詞句（対句をも含む）
- 9) 修飾語句が名詞または名詞句と同格の場合
- 10) 名詞＋形容詞節

一色 (1976), p. 71.

このうち筆者が調査の対象としたのは、関係詞節、現在分詞、過去分詞、不定詞である。これらの項目を選んだのは以下のような理由による。まず出発点が「関係詞節」であったため、「関係詞節」をベースにして考えてみたいと思った。関係詞の中には必ず動詞が含まれているので、これと比較するのであれば同じように動詞が含まれている用法が適切であろうと思われた。次に、上に挙げた用法はどれも、日本人が中学校段階で習う重要な文法項目である。これらの項目が、大学段階でどの程度定着しているかを調べるという点でも意味があると思われた。これらの理由により調査項目を決定し、さらに不定詞は *to do* 型と *to be done* 型に分類した (cf. 一色 (1976))。これは、受け身変形が加わることによって、結果に何らかの違いが生ずるのではないかと予想してのことである。

次に調査の方法であるが、「何が難しいのか」を調査するのであれば、通常行なわれているような文法テストを課して正答率を比較するという方法が考えられる。しかしこれでは単に文法力が判るだけで、学生の好んで用いるストラテジー（たとえば関係詞節はあまり使わないが、分詞ならば使う、など）ははっきりとせず、従って全般的にどのようなストラテジーが好んで用いられているかは判らない。そこで筆者は、以下のような択一可能の和文英訳方式を用いることにした。たとえば次のような和文を与え、英訳させる—「私は通りを走っている少年を知っている」。この和文を英訳する場合、2通りの方法が可能である。つまり、関係詞節を用いた *I know the boy who is running along the street.* と、現在分詞を用いた *I know the boy running along the street.* の2通りである。学生は与えられた和文に対して、自分の使いやすい方を選ん

で答えるであろう。つまり、学生が関係詞節と現在分詞のどちらを苦手とし、敬遠するかを知ることができるわけである。あるいはまた、全々答えられないかもしれないし、全々別の答え方（たとえば **The boy is running along the street and I know him.** など）をするかもしれない。いずれにしても、この方法で調べていけば、学生が英語の後置修飾に関してどの程度の処理能力を持っているか、またどのような **preference** を持っているかをある程度知ることができると思われる。調査の項目は以下の4つである。

1. 関係詞節 or 現在分詞
2. 関係詞節 or 過去分詞
3. 関係詞節 or to do 型不定詞
4. 関係詞節 or to be done 型不定詞

3. 調査の手順

被験者となったのは、松山東雲短大英文科の一年生70名である。学生には、前述の4つの項目を折りこんだ和文を与え、英訳させる。

- ① 私は通りを走っている少年を知っている。
- ② その子供らにもぎ取られたりんごがここにある。
- ③ 彼女にもらったペンは書き味が悪い。
- ④ 汽車の中で読む本を持っていた方が良いよ。
- ⑤ 彼がはじめに病院に運ばれるべき人です。^{注1)}

これらの和文はそれぞれ、2通りずつ英訳が可能である。

- ① **I know the boy who is running along the street.** (関係詞節)
I know the boy running along the street. (現在分詞)
- ② **Here are the apples which were picked by the children.** (関係詞節)
Here are the apples picked by the children. (過去分詞)
- ③ **The pen which was given by her doesn't write well.** (関係詞節)
The pen given by her doesn't write well. (過去分詞)
- ④ **You had better take a book which you can read in the train.** (関係詞節)
You had better take a book to read in the train. (型不定詞)
- ⑤ **He is the first person that should be carried to the hospital.** (関係詞節)

He is the first person to be carried to the hospital. (to be done 型不定詞)

関係詞節と過去分詞の間の択一を調べるための問題だけを2題作ったのには理由がある。②の「その子供らにもぎ取られたりんごがここにある」という問題は、過去分詞を意識するあまり不自然な日本語になっているし、やや誘導的でもある。そこでもうひとつ、「彼女にもらったペン」という、能動態でも書けるような自然な日本文を入れておいた。これら5問の和文英訳を、20分程度の時間を与えて学生にやらせた。意図している箇所以外で考えこんでしまわないよう、学生には辞書（和英、英和）の使用を許可した。

結果の分類に関しては次のような方針をとった。冠詞の脱落、時制に関するミス、スプリングミスなど大すじに関係のない誤りを含んでいる文は分析の対象にし、構文的に大きく誤っていて意味の通じないもの（語順の誤りなど）のみを分析からはずした。ただし、このことに関しては若干の問題があった。たとえば①であれば、***I know the boy who running along the street.** や、***I know the boy is running along the street.** などをどう扱うかという問題である。言うまでもなく両方とも非文であるが、調査の対象からはずすほど意味不明でもない。そこで筆者は、被験者がもし関係詞節を用いて表現しようとしたなら、まずはじめに先行詞にふさわしい関係代名詞を挿入するであろうと考え、前出の2つの非文のうち前者は関係詞節を作ろうとして **be** 動詞を入れ損った例であり、後者は現在分詞を用いて修飾しようとして **is** を消去し損った例であろうと考えた。そして分類の際には、共に重要な **error** を含んでいるが、前者を「関係詞節」、後者を「現在分詞」として分類した。同じように②における ***Here are the apples which picked by the children.** は「関係詞節」として、***Here are the apples were picked by the children.** 「過去分詞」として分類し、また③の ***The pen was given by her doesn't write well.** も「過去分詞」として分類した。④と⑤については、関係代名詞や不定詞が現われていないもの（たとえば ***He is the first person carry to the hospital.**）はすべて **error** とし、分析の対象からはずした。

4. 調査の結果と考察

調査・分析の結果は以下の通りである。

表 2. 注2)

①	関係詞節	現在分詞	error	関係詞節使用率
	40人	24人	6人	62.5%
②	関係詞節	過去分詞	error	関係詞節使用率
	57人	6人	7人	90.4%
③	関係詞節	過去分詞	error	関係詞節使用率
	43人	3人	24人	93.4%
④	関係詞節	to do 不定詞	error	関係詞節使用率
	30人	16人	24人	65.2%
⑤	関係詞節	to be done 不定詞	error	関係詞節使用率
	52人	6人	12人	89.6%

まず第一に判ることは、このテストのように関係詞節と選択可能の場合は、一般的に関係詞節が好んで使われているということである（各項目の関係詞節使用率をみると、すべての項目が 60% を上回っており、② ③ ⑤ については 90% 前後である）。このことは、はじめに紹介した Schacter and Hart (1979) の報告を思いおすとやや意外である。つまり、他の言語話者と比べれば、日本人は関係詞節を苦手としているかもしれないが、しかしそれ以上に分詞や不定詞による修飾を苦手としていることがわかる。次に関係詞節使用率を多い順にみると、過去分詞との択一を調べた ③ の 93.4% が最高で、ついで ⑤ の to be done 型不定詞と ② の過去分詞が 89.6% と 90.4% ではほぼ同率である。それにひきかえ、① の現在分詞との択一や ④ の to do 型不定詞との択一ではそれぞれ 62.5%, 65.2% であり、② ③ ⑤ と ① ④ の間には数的に大きな開きがある。このことは受け身変形が学習者に大きな影響を及ぼしていることを示している。つまり受け身変形の加わった文に遭遇すると、ほとんどの学生は過去分詞や to be done 型不定詞の可能性を退けて、関係詞節を使用するということである。もう一度まとめてみると、次のようなことがこの調査で明らかになった。

1. 日本人学生は英語の後置修飾を処理する際、一般的に分詞や不定詞よりも関係詞節を好んで用いる。

2. 文に受け身変形が加わっている場合、1の傾向がいっそう顕著になる。つまり学生は、分詞の中では過去分詞、不定詞の中では **to be done** 型を特に苦手としているということであろう。

さて次に、なぜこのような結果になったのか、その原因・理由を考察してみたい。まず 1. についてであるが、学生が関係詞節を好むのは、「節」が分詞や不定詞に比べて「わかりやすい」からに違いない。ではなぜ「節」はわかりやすいのだろうか。まず考えられるのは、節の中には主語と動詞が必ず存在するので、それらが主部と述部の関係をおのずとはっきりさせ、結果的にわかりやすくしているということである（これは、節の方が深層構造に近く、変形操作があまり加わっていないということと関係があるのかもしれない）。その上、節の中には **tense**, **aspect** や **modality** がはっきりと表われるという特徴があり、この特徴が節にとって重要な役割を果たしていると思われる。Fodor and Garrett (1967) は、**that**節を認識する際、**tense** の存在がいかに有用であるかについて次のように述べている。

For example, *that* complements are the only ones within which tense can appear in English ("He thinks that John *will* be late" but "He believes John *to be* an idiot" and not "He believes John will be an idiot"). For this reason, the presence of marked tense is an extremely efficient clue to *that* complementation in reduced sentences (i.e., in sentences where the word "that" has been deleted).

Fodor and Garrett (1967), P. 295.

すなわち、節そのものの特徴（主部、述部の関係が明確である上、**tense** や **modality** もはっきりと表面に表われる）が、そのまま節のわかりやすさや使いやすさにつながっていると考えられる。

次に考えるべきなのは、日本語の影響ということである。テストの問題として与えたのが日本語であったから、このことは無視することはできないであろう。ここでもう一度、問題として与えた5つの日本文を見直してみたい。

- ① 私は通りを走っている少年を知っている。
- ② その子供らにもぎ取られたりんごがここにある。
- ③ 彼女にもらったペンは書き味が悪い。
- ④ 汽車の中で読む本を持って行った方が良いよ。

⑤ 彼がはじめに病院に運ばれるべき人です。

これらの日本文は、いずれも名詞を動詞の諸形で修飾しているという共通の特徴を持ちはするが、もとより英語におけるような「節」「分詞」「不定詞」などという区別はなく、「節」の定義だけでもきわめてあいまいで一致した考え方は見あたらないようである。このような中で、寺村 (1980) の次のような言葉は示唆的である。

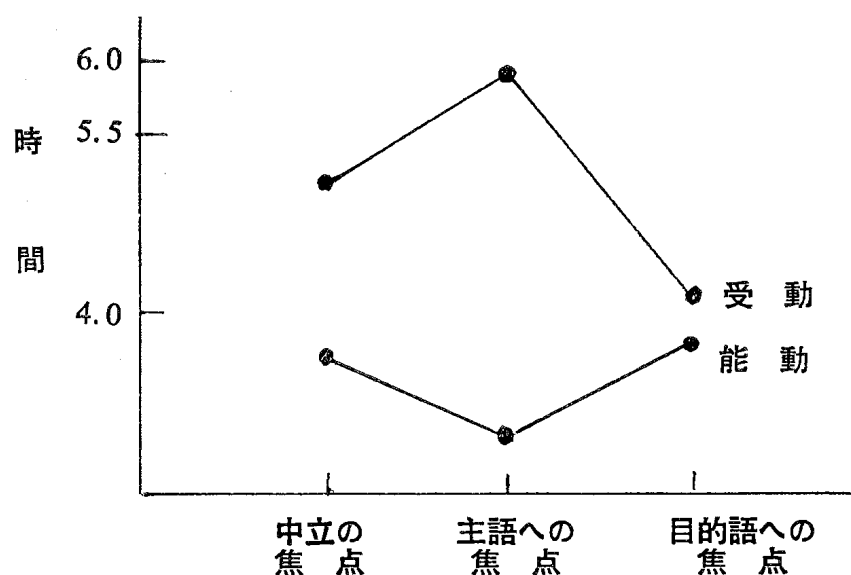
ある動詞または形容詞 (または名詞+ダ) で終わる発話が「節」であるか否かは、その述語が陳述形か否かしか外形的なしるしはない。しかし (中略) そのメドは、1つは現在形、過去形はテンス性を認めることができるか否か、であり、もう1つは「誰 (何) が」どうこうするという意識があるかないか、ということである

寺村 (1980), p. 252

つまり、日本語においても英語の場合と同じように、**tense (aspect)** や **modality** が「節」の重要な標識になるということであろう。この認識を持って、前出5つの問題文をみてみよう。5つの問題文の中の、名詞を修飾している動詞に着目してみると、① 走っている、② もぎ取られた、③ もらった、④ 読む、⑤ 運ばれるべき、であり、① は **aspect**、② と ③ は **past tense**、⑤ は **modality** をそれぞれはっきりと表わしている。⑤ の「読む」という現在形だけは、過去に対する現在または未来という意味あいが薄いので、テンス性は希薄であると思われる。すなわち ① ② ③ ⑤ は、問題文である日本語自体が充分「節」の特質を備えていると考えることができる。したがって、これらを **input** として与えられた学生の頭の中には、自然に「節」の図式がまず出来あがり、英語では分詞や不定詞の方が適切な場合でも、関係詞節に流れてしまうのだと思われる。ただ、④ の場合のようにテンス性の点からいって英語の不定詞に最も近いと思われるものでも、65.2% の学生が関係詞節を使っているという事実を考えれば、「日本語の影響」だけですべてを説明するのはやや難しいということになるであろう。やはりはじめに考察したように、英語の関係詞節自体のわかりやすさが大きく影響しているようである。

上述のことは、次に受け身変形との関わりについて考える際にもポイントになるとと思われる。前に述べたように、受け身変形の加わった文では (②, ③, ⑤) 90% 前後の学生が関係詞節を使っている。これは ①, ④ の 62.5%, 65.2% と比べると、目をみはるような高率である。こうした現象は、これまでの考察をふまえると次のように説明されられると思われる。受け身変形の加わっ

た文は、加わっていない文に比べると操作的にも概念的にも複雑で、**recognition** も **production** もしにくいはずである。このことは、いろいろな心理言語学者が実験し実証していると思われるが、たとえば **Savin and Perchonock (1965)** の行った **recall test** では、“**The boy has hit the ball.**” という能動態については平均 **5.27 words** 再生されたのに対して、“**The ball has been hit by the boy.**” という受動態では **4.55 words** しか再生されなかったという (p. 351)。また **Tannenbaum and Williams (1968)** の産出テストによると、焦点がどこにあっても、受動態は能動よりも産出に時間がかかったということである (下図参照)。



焦点の3つの条件での能動と受動についての平均産出時間

[Tannenbaum and Williams, 1968 による]

(フォーダー他 (1982) から引用, p. 423)

つまり受け身変形の加わった文を操作するのは、そうでない文を操作するより時間がかかり、**native speaker** にとっても「難しい」わけである。まして日本人の学生がそれを首尾よく処理するためには、主部と述部の関係がはっきりとわかる「節」を用いる方が安全だということではないだろうか。実際、この受け身変形は思った以上に学生にとって重荷であったらしく、たとえば ② の問題のように日本語にもはっきりと受け身形(「もぎ取られた」)があらわれている場合でも、わざわざ **the children picked** と能動態にして訳している者が 57人中14人いたし、③ の「彼女にもらった」に到っては、**she gave me** と能

動態にした者が43人中、半数近くの20人もいた。③の場合は特に、**input** である日本語の「もらう」という言い方自体が人物関係があいまいで難しく、能動にするにせよ受動にするにせよ相当に手こずったようで、まったく意味をなさない **error** をおかした者が24人と多めであった。また関係詞節使用率も93.4%と最高で、②の90.4%を上回っていた。②と③は両方とも、関係詞節と過去分詞の拓一をみるための問題として作ったのだが、受け身操作そのものの難易によっても結果に違いが出ることが明らかになった。

5. 結論

日本人は他の言語話者と比べると、関係詞節の使用率が低いということであったが、後置修飾の用法の中では、実は最も関係詞節を好んで使うということが今回の調査で明らかになった。今回の調査から、日本人が好みとする後置修飾のストラテジーを、単に数字の上からではあるが順に並べてみると、関係詞節、現在分詞、**to do** 型不定詞、**to be done** 型不定詞、過去分詞ということになる。特に最後の2つは同じ程度に使用率が低く、逆に言えばこれら2つの定着率の低さが問題だといえるだろう。しかし、教育的な見地からすると関係詞節でも表現できている項目は良い方であって、むしろ **error** の数の多い方がより問題であるかもしれない。そこで今度は **error** の数に注目してみると、思いの他数が多いと感じさせられるのは④の **to do** 型不定詞に関する項目である。この項目は70人のうち、1/3以上の24人が意味をなさない **error** をおかしている。これは数値的には③と同じであるが、③のように受け身変形が加わっているわけではないし、また受け身変形の加わった **to be done** 型不定詞における **error** の数(12人)を上回っているのである。この **error** の内容はといえば、不定詞でも関係詞節でもない意味をなさないものばかりであった(e. g. **a reading book in the train*, **a book read in the train* など)。つまり、この問題で不定詞あるいは関係詞節を用いるということに気づかなかった学生が多勢いたわけである。関係詞節を使うことを思いつかなかった学生については、先に述べたように **input** の日本文にテンス性が希薄であったためだという理由が考えられる。しかしながら、それならばすぐに不定詞を使うことに思いあたるべきで、なぜならこの問題は日本文の性質からいっても不定詞を用いるのが最も適切だからである。このように考えてゆくと、項目④については、**error** の数からいっても、16/46という不定詞の使用者数からいってもやや問題が残ると思われる。つまり、教育的見地からすれば、分詞よりはむしろ

不定詞の方に問題が多いわけで、不定詞を使うべき場所できちんと使えるように教えていく配慮が必要である（たとえば松井（1980）にみられる **to-list** の利用など）。また先に述べたように、受け身変形の影響力の大きさも無視することはできない。過去分詞や **to be done** 型不定詞は一度教えて安心するのではなく、出てくるたびに繰り返し注目させ、意識的に定着をはかることが大切だと思われる。

6. おわりに

「日本人は英語の後置修飾について、どのような対処をしているか」という所から出発し、結論として「関係詞節を使えるものに対しては、多くの学生がそれを使って処理する」ということが得られた。そしてこの現象は、日本語の影響もさることながら、関係詞節自体の持つ「わかりやすさ」に帰因しているらしいことがわかった。

目の前に2つの選択を迫られた時、少しでも易しい方を選ぼうとするのはごく自然な人間行動であるが、この場合「関係詞節」が易しい部類に属していたという事実は **Schacter and Hart (1979)** の調査結果を思いおこせば、やや予想に反したことであった。ある刺激を受けて文産出をする場合、そのプロセスの根底には「節」すなわち主語と動詞の完備したものが存在しているのだろうか、とも思う。また受け身変形が思いの他学習者の反応に大きな影響を及ぼしている事に着目すると、変形操作の多少が文の産出に少なからず関わっているのではと考えさせられる（ただし、変形操作の多少と困難度がいつも必ず一致すると証明できたわけではない）。

また、こうした現象を学習者の **Interlanguage** の一側面として捉えると、節に比べて分詞や不定詞は難しく、現段階では習得の最中であると考えられることもできる。^{注3)} このように、この問題は心理言語学的な面からも、中間言語という側面からもさらにいろいろな考察が可能であると考えられる。今回は事実を提示し、原因・理由を考察するだけで終わってしまったが、今後は後置修飾に限らず、「学習者が産出しやすい文の特徴」、「習得しやすさ」などについて研究をすすめていきたいと思っている。

注

- 1) 問題文を作るにあたっては、一色（1979）を参考にした。

- 2) 表の中の「関係詞節使用率」は関係詞節を使って書いた学生の数、分析の対象となった学生の数で割ったものである (error は分析からはずしてある)。たとえば
- ① の項目であれば、 $\frac{40}{40+24}=0.652$ となる。したがって、本文中の「ほとんどの学生」とか「全体の」などは、各項目で分析の対象となった学生の「ほとんど」、あるいは「全体」であって、被験者 70 人を指しているわけではない。
- 3) Schacter and Hart (1979) によると、英語を外国語として学ぶ学生たちを対象に *Difficulty and developmental orders of verb complements* を調査したところ、Clausal, Infinitival, Gerundive の順で習得していくということである。本研究でひき出した結果と共通するところもあり、非常に興味深い。

References

- Butterworth, B. (ed.) (1980), *Language Production* (vol. 1) New York; Academic Press.
- Fodor, J. A. and M. Garrett (1967), "Some Syntactic Determinants of Sentential Complexity," *Perception and Psychophysics*, vol. 2, no. 7, pp. 289-296.
- Owen, T. and E. Kintgen (1974), *Transformational Grammar and the Teacher of English*, New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc.
- Ritchie, W. (ed.) (1978), *Second Language Acquisition Research*, New York: Academic Press.
- Savin, H. B. and E. Perchonock (1965), "Grammatical Structure and the Immediate Recall of English Sentences," *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, no. 4, pp. 348-353.
- Schacter, J. (1974), "An Error in Error Analysis," *Language Learning*, vol. 24, no. 2, pp. 205-214.
- _____ and B. Hart (1979), "An Analysis of Learner Production of English Structures," *Georgetown Univ. Papers on Languages and Linguistics*, no. 15, pp. 18-75.
- Slobin, D. I. (1971), *Psycholinguistics*, Glenview, Illinois: Scott, Foresman and Company.
- Tannenbaum, P. H. and F. Williams (1968), "Generation of Active and Passive Sentences as a Function of Subject and Object Focus," *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, no. 7, pp. 246-250, quoted by フォーダー他 (1982).
- フォード, J. A.・T. G. ビーヴァー・M. F. ギャレット (1982), 『心理言語学』, (岡部慶三, 広井脩, 無藤隆 共訳), 誠信書房
- 井上 和子 (1977), 『変形文法と日本語, 上』(第3版), 大修館書店
- 一色マサ子 (1976), 『修飾 (上)』(第3版), 研究社出版

- 國廣 哲彌 (編) (1980) 『日英語比較講座, 第2巻, 文法』, 大修館書店
松井 恵美 (1980) 『英作文における日本人的誤り』 (第4版), 大修館書店
竹蓋 幸生 (1982) 『日本人英語の科学』, 大修館書店
寺村 秀夫 (1980) 「名詞修飾部の比較」, 國廣 (編) (1980), pp. 221—266.

(松山東雲短期大学)

Strategies in Manipulating English Postnominal Modification Patterns Employed by the Japanese College Students

Chizuru MORI

In this paper, we investigate how the Japanese college students manage the patterns of postnominal modification in English. There are two reasons why we chose this subject. Schacter (1974) says that Japanese and Chinese students produce fewer relative clauses in their English compositions because they do not have any patterns of postnominal modification in their native languages. Indeed, it is often pointed out that a Japanese cannot manage the postnominal modification patterns in English very well. Therefore, first of all, we would like to investigate how well the Japanese college students deal with several patterns (including the relative clause) of postnominal modification. Secondly, we would like to examine which pattern the Japanese students prefer and which they do not.

The test procedures employed in this paper are as follows: The subjects (first year college students) are given five sentences in Japanese and required to translate them into English. Each Japanese sentence can be translated in two ways. For example, a Japanese sentence like *watashi wa tōri o hashitteiru shōnen o shitteiru* can be translated either 'I know the boy who is running along the street' or 'I know the boy running along the street'. This test enables us to know not only how well they can manage the patterns but also which pattern (relative clause or present participle in this case) they prefer. The following alternatives are examined in this way.

1. relative clause or present participle

2. relative clause or past participle
3. relative clause or *to do* infinitive
4. relative clause or *to do done* infinitive

As a result, it was found out that the Japanese students preferred the relative clause when given the choice between the relative clause and an other pattern. Present participle and *to do* infinitive had preference next to relative clause, and past participle and *to be done* infinitive were seldom used. It can therefore be said that a passive transformation has something to do with the students' behavior.

In the final section the reasons why the Japanese students prefer the relative clause are considered from the following viewpoints;

1. the clearness of the 'clause' itself
2. mother tongue interference

The conclusion also draws attention to pedagogical considerations related to these findings.

(Matsuyama Shinonome Junior College)